＊＊＊　記　事　＊＊＊

消　息

神奈川県北東の医史跡めぐりツアーを終えて

一、午前の部

今年は日本医史学会神奈川地方会が創立されてから七周年になるので、これを記念して二つの記念行事を行った。それは　一、公開講座演題：神奈川の医史跡　演者：大滝紀雄先生　二、神奈川県北東の医史跡めぐりツアー　であった。しかして医史跡めぐりツアーは、先に横浜総合医学振興財団の助成を受けて作成した小冊子『神奈川県北東の医史跡めぐり』を実地に見聞して、医療の発展についての貴重な足跡を深く心に刻もうという意図があったのである。

ここでは後者の四月一八日(日)に行った神奈川県北東の医史跡めぐりツアーの中の鶴見方面の印象を述べる。

先ず参加者であるが、二一名の方が参加された。天気は朝から曇っていて昼過ぎから雨が降り出した。しかし幸いにも強い雨にならず、予定の全行程をつつがなく終えることができたことは大変嬉しいことであった。

さて、当日午前九時半にJR鶴見駅東口に集合した一行は、午前の解説者である中西淳朗先生の先導で、徒歩五分のところにある「まるはちビル」に向かった。このビルはもとは「鶴居堂」と称し、痰切り薬の家伝妙薬〝苦楽丸〟で有名な薬局であった。ところが昭和一二年頃に閉鎖し、文房具店「まるはち」となり、中西医院は同ビル内に同居しているのである。中西先生が医史学の造詣が深いのは、この辺に理由があるのかもしれない。

ついで「生麦事件の碑」を訪れた。この碑は明治一六年一二月八日黒川荘三氏が私費を投じて建立したものである。これを知って何ともいえない気持ちの高ぶるのを覚えた。今は横浜市地域史跡として市教育委員会が保存している。

つぎに鶴見区駒岡の常倫寺にある久志本左京家の墓と、都筑区勝田町の最乗寺にある久志本内蔵家の墓に参詣した。

久志本家は元は伊勢の外宮の神官であったが、天正年間に徳川家康の侍医として召し抱えられ、江戸に来てから式部家（本家）、内蔵家、左京家に分かれた。すなわち久志本一六代常員の子常光は式部家の祖となり、常光の弟、常眞は別家を作った。常眞の孫の常範に子が三人おり、長男常亮が内蔵家の祖となり、三男常諄が左京家を作った。

常諄の孫の常勝は将軍綱吉の病気を治療した功により八〇〇石の知行が与えられ、従来の知行を加え計二〇〇〇石となった。かくして左京家は大いに繁栄した。そこで彼は左京家の領地である駒岡に常倫寺という菩提寺を建立し、最乗寺にあった父（常倫）の墓をここに移したのである。

内蔵家の墓は、元内蔵家の領地であった都筑区勝田町の最

乗寺の墓地内にある。後裔の常孝先生の墓はここにある。

以上述べたことから、久志本家の今日にいたるまでの経過が明らかとなった。今後はさらに久志本家で行われていた医療の詳細な検討が望まれる。

なお最乗寺の近くにある関家住宅を見学した。この住宅の家主はこの一帯が内蔵家の領地であった時代に名主をつとめた。現在この住宅は国の重要文化財に指定されている。

かくして午前の最後の目的地である横浜市立歴史博物館にむかった。

二、午後の部

午後は川崎方面の医史跡めぐりを行った。解説は深瀬泰旦先生にお願いした。

まず宮前区菅生の長安寺にある間宮主水次郎長安の墓に参詣する。長安は杉田玄白の先祖で、武蔵国久良岐郡杉田村（現在の横浜市磯子区杉田町）に生まれた。小田原の北条氏に仕え、多くの勲功をたてたが北条氏が滅亡すると諸国を転々とした後杉田村に帰り住み、姓を杉田と改めた。その後橘樹郡稲毛領に移り、一寺を建立し、自らの名をつけた法林山長安寺とした。没後この寺に葬られた。長安の孫忠安に二児があり、次子の東は甫仙と名のって医師となり江戸に出た。この甫仙こそ玄白の祖父にあたるのである。

この長安の生涯をみると、當時一人の武士がいかに正しく生きようとしても、自分の仕えた主人が滅亡すると、封建制のためにその後生きていくには大変苦労したことがわかる。

つぎに訪れたのが宮前区野川の高台にある威徳山影向寺（ようごうじ）である。この寺は白鳳時代末期（七世紀末）に創建されたもので、有名な薬師堂と影向石がある。薬師堂にまつられている薬師如来像は欅の一木造りの坐像で、一二世紀前半の作である。この如来像と両脇侍菩薩立像の三尊像は明治三三年に国宝（旧）に指定され、戦後昭和二五年になって国の重要文化財に指定がえになった。

このようなわけで簡単には薬師堂に入って薬師如来を拝むことはできないのであるが、住職のご好意により参加者全員薬師堂の中に入って薬師如来を拝むことができたことは幸いであった。

影向石はもともと塔の礎石として用いられたものであるらしい。これが火災にあって塔がなくなり礎石の凹みにたまった水が霊水として眼病に効果があると信ぜられ、近年までこの霊水を求めて多くの人が参詣に訪れていたが、現今は祈願の内容が合格祈願に変わってしまったので、霊水を求めて参詣にくる人がいなくなってしまった。

影向石の水が眼病に効果があるということを、約千三百年間多くの人が信じていたかということは、現今の医療状況からみれば一つの驚異である。

最後に参詣したのは川崎大師の「施茶翁塚」である。これは川崎大師平間寺の五重塔の裏手にあるヒョウタン形をした碑である。二つのヒョウタンを横に並べ、その上に更に大き

なヒョウタンを置いたこの碑は、表面には「施茶翁塚」と刻し、裏面には「地獄いや極楽とても望み無し　又六道の辻で施茶翁」と刻まれている。施茶翁とは上州館林藩主松平右近将監武厚の侍医羽左間宗玄をさす。この碑は、平間寺の再建が弘法大師一千年の御遠忌にあたる天保五年（一八五四年）に完成したのを祝って天保六年に建立されたものである。彼が著した『老婆心書』は文化一四年（一八一七年）の板行で、漢字仮名混じり文で書かれている。妊娠、出産にはじまり、急慢驚風、痘瘡にいたるまでその範囲は広く、その論説は古今の諸家の医説を折衷している。

かくしてこの医史跡めぐりツアーは無事終了した。帰宅で一緒になった参加者の一人が、このような催しはできるだけ多くやって欲しいですねといわれたことが、筆者の脳裏に深く残った。

さらに今まで神奈川県の医療の発展は明治以後からと思われていたが、今回のツアーによってすでに明治以前に多くの先人達が活躍していたことがわかってきた。今後はこの先人達のすばらしい業績の掘り起こしを是非しなければならないと考えている。

（日本医史学会神奈川地方会　杉田　暉道）

精神医学史国際シンポジウム（International Symposium History of Psychiatry on the Threshold to the 21st Century－Two Millennia of Psychiatry in West and East）印象記

平成一一年三月二〇日と二一日の二日間、名古屋市立大学医学部において、同大学精神医学講座、濱中淑彦教授（現名誉教授）の主催で精神医学史の国際シンポジウムが開かれた。精神医学史という研究分野については、最近日本でも、平成九年の精神医学史学会の設立と機関誌『精神医学史研究』の発刊などが実現し、ちょうど海外の隆盛と歩調を合わせる準備ができたところであった。このような状況を考えると、国内外の研究者たちを招いてこうしたシンポジウムが開かれるのは精神医学史研究の推進にとってまさに絶好のタイミングだったと言える。シンポジウムのタイトルが示すように、その内容は西洋と東洋の二〇〇〇年に渡る精神医学の営みを横断するもので、ヨーロッパ、アメリカ、韓国、中国そして日本から参加したシンポジストたちの顔ぶれとともに、非常にスケールの大きな学問的試みであった。

セッションの流れを見ていくと、一日目は「ヨーロッパの精神医学史」と「中国・韓国・日本の精神医学史」、二日目は「近代日本の精神医学の黎明」、「精神医学史における臨床的・理論的諸概念」、「認識論的、社会・文化的脈絡における精神医学史」という順序で、それぞれに四から八題の発表と